

# 稲・大豆作情報 (N0.5)

## 1. 水稲作況情報田の生育概況(7月30日現在)

品 種 場 所	移植日 栽植株数	年 次	現在の生育状況				概 況
			草 丈 cm	茎 数 本/m <sup>2</sup>	主稈 出葉数	葉 色	
夢しずく 佐賀市 本庄町	6/16 17.6株/m <sup>2</sup>	本 年	83.0	312	11.2	39.7	先週よりも天候が好天にシフトしたが、生育の遅れは取り戻せていない。 早生品種は幼穂形成期を迎えている。(夢しずく：幼穂長1mm) 中晩生品種は、有効茎数は確保できているため、中干しを開始する。
		平 年	74.6	383	11.5	39.9	
		平年比	(111)	(81)	(-0.3)		
さがびより 小城市 芦刈町	6/20 17.7株/m <sup>2</sup>	本 年	67.5	383	10.7	40.7	
		平 年	68.2	524	12.0	39.3	
		平年比	(99)	(73)	(-1.3)		
ヒヨクモチ 小城市 牛津町	6/28 20.1株/m <sup>2</sup>	本 年	47.7	546	10.7	38.3	
		平 年	47.3	633	11.7	42.8	
		平年比	(101)	(86)	(-1.0)		

注1) 各品種 前作：麦、前前作：水稲。

注2) 施肥及び病害虫防除は地区基準に準ずる。

## 2. 水稲管理

### ○今週の管理

#### 夢しずく

- ・穂肥施用時は湛水し、その後の間断灌水では、地固めと根に空気を送るため落水期間を長めにとる。
- ・穂肥施用時期となっており、診断結果を基に施用する。また、幼穂形成期以降は、要水量が多い時期であるので水が切れないよう注意する。

### 【平坦部での夢しずく穂肥診断基準】

幼穂形成始期の草丈	葉 色		施 用 時 期		穂肥施用量	
	群落	葉緑素計	出穂前	幼穂長	N成分 kg/10a	BB602 kg/10a
73cm以下	3.0以下	34以下	20~22日	1mm	2.0	12.5
	3.0~3.5	34~38	18~20日	2mm	1.5	9.4
	3.6以上	39以上	施 用 し な い			
73~79cm	3.0~3.5	34~38	18~20日	2mm	1.0	6.3
	3.6以上	39以上	施 用 し な い			
80cm以上	施 用 し な い					

※草丈は、幼穂の伸長程度により幼穂形成期(1mm)を基点に、前後1日あたり1cm増減する。

※出穂前15日以降の穂肥は、玄米タンパク値を上昇させるので施用しない。

### さがびより、ヒヨクモチ

- ・有効茎数が確保できた圃場は、中干しを開始する。(目安は前回記載の通り)中干しは、軽い亀裂が入り足跡がわずかにつく程度で1週間程度実施する。
- ・中干し終了後の入水は、一度に溜め込まず、軽く田面を走らせる程度とする。その後は間断灌水とする。(一気に水を溜めると下葉枯れが助長されるので、注意する)

○病害虫の発生状況 ～圃場ごとの発生状況を確認～

- ・トビイロウンカ防除の際は、湛水するとともに、株元まで薬剤が十分かかるよう丁寧に散布する。
- ・今年度はトビイロウンカの飛来波が4回と、平年よりも多く確認されている。防除時期についても地域や品種等で異なるため、圃場の発生状況やJA各支所で行うウンカ調査の状況を確認して防除を行う。また、下図は各飛来波の生育パターンとなっているため防除の参考に用いる。

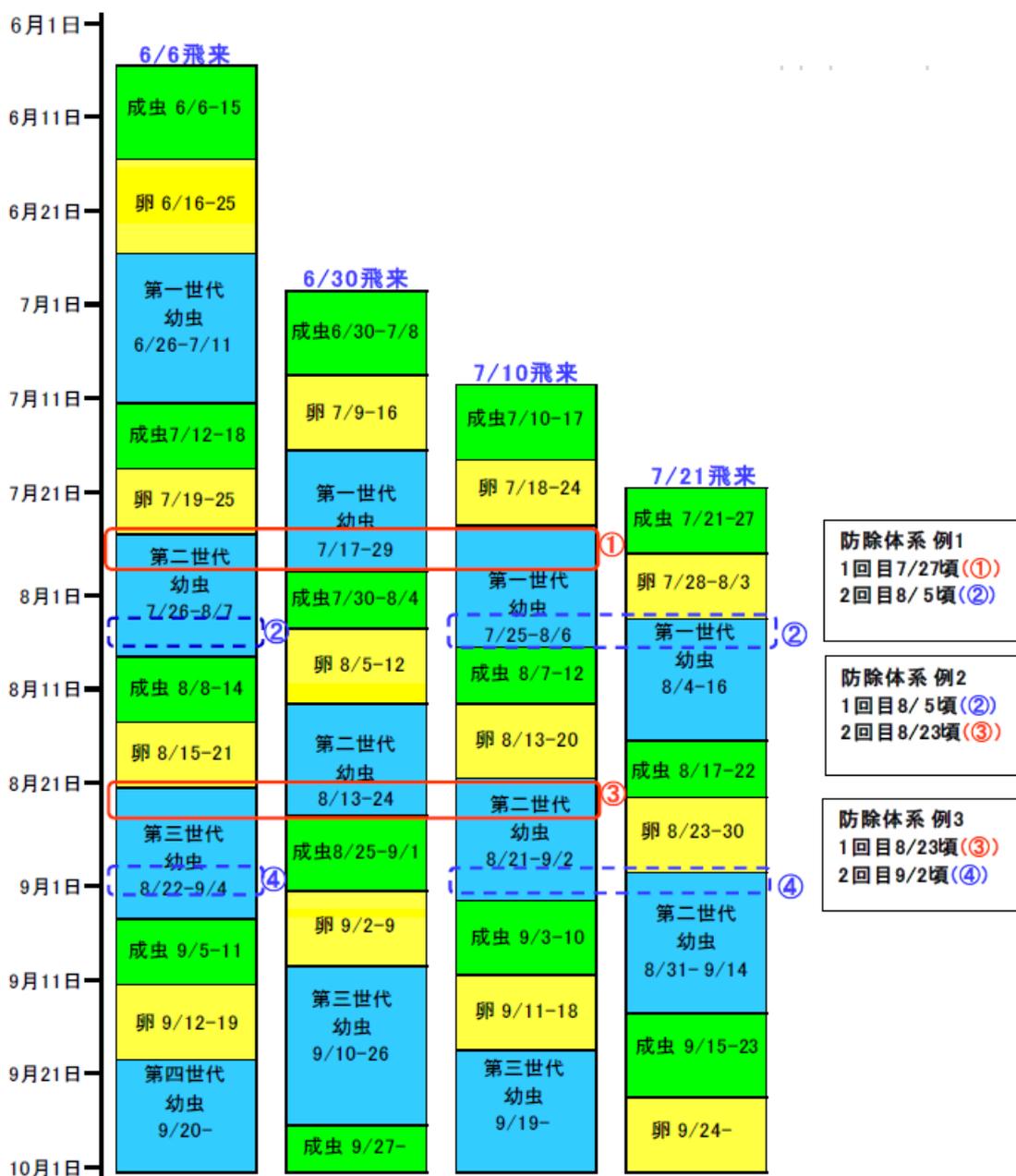


図1 トビイロウンカ各世代の発生予測(第4版、2019年7月24日作成)

1. 6月6～7日頃(図では6月6日)、6月30日頃、7月10～11日頃(図では7月10日)、7月21日頃に飛来したウンカを起点とし、有効積算温度と佐賀市川副町の気温データ(7月23日以降は平年値)を基に作成した。
2. 普通期水稲には、6月6日飛来虫は定着していないと考えられる。また、早植え水稲の場合、7月21日飛来虫の第三世代幼虫が増殖する前に収穫されると考えられる。これらの例のように、各飛来波に対する防除の重要度は、田植え時期によって異なる。
3. 本種に対しては、幼虫ふ化揃い期の防除効果が最も高い。しかし、本年は断続的に飛来がみられたことから、飛来波ごとの幼虫の出現時期は異なると予想される。複数の飛来波の幼虫を、より効率的に防除可能と考えられる時期として「6/6、6/30、7/10飛来波を対象とした場合を実線赤枠(①、③)」「6/6、7/10、7/21飛来波を対象とした場合を点線青枠(②、④)」で示した。さらに、全ての飛来波を対象とした場合の体系防除の例(1～3)を、本図の右側に示した。
4. 田植え時期に加え、地域、水稲の品種、これまでの防除歴等の違いによってウンカの発生量は異なるので、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、防除対策を講じる。
5. 今後の飛来状況、気象経過に応じて、本図は更新する。最新情報は、農業技術防除センターのホームページで確認する。

○いもち病と紋枯れ病の発生が懸念される時期となりました。

田回りを励行し発生が確認された場合は防除を行いましょう。

- ・いもち病の発生は、進展型病斑が上位葉に発生しているようであれば、早急に防除を実施する。
- ・幼穂形成期以降、気温が高い日が続く場合は、紋枯病の発生に注意する。

### 3. 大豆管理 ～明渠の角・水尻付近が確実に繋がっているか確認を～

○排水対策 局地的なゲリラ豪雨に備えるため、排水溝の整備を行っておく。

○培土 1回目：本葉2～3枚の頃、子葉が隠れる程度におこなう。

2回目：本葉4～5枚時に、初生葉（子葉の上の葉）まで隠れるようにおこなう。

○雑草対策

- ・イネ科雑草が多いところでは、ポルトフロアブル等で防除する。

イネ科雑草10葉期まで

○再々播種

再播種後、夕立・局所的な豪雨などで播種後7日たっても出芽が確認できない場合は、土中を確認し、腐敗などにより出芽が期待できない場合は下表を参考に再々播種も予定しておく。

また、降雨後滞水のため、再播種が8月以降となる場合は、条数を増やし栽植密度を上げることを検討する。

栽植本数 ㎡あたり	栽植様式 条間×株間×1株本数	播種量 (kg/10a)	施肥
18本	75 × 15 × 2	5.3	BB480を40kg/10a
20本	3条播き 20 × 2	6.0	(生育量確保のため行う)

令和元年産水稻生育期間気象グラフ（アメダス：佐賀）

佐城農業改良普及センター

